

# 新たな輪作作物として導入 健康ブームで需要拡大、増産へ

## もち麦—JAたきかわ

JAたきかわ販売部特産販売課長 徳永 裕一

JAたきかわは1998年に滝川市、滝川市江部乙町、赤平市の3JA、そして2001年に芦別市のJAが合併して誕生した。管内は石狩川と空知川の合流

地点として豊かな土壌に恵まれ、札幌と旭川を結ぶ国道12号沿線、富良野、帯広へと続く国道38号沿線であり、交通の中継地でもある。JAたきかわは滝川

市、赤平市、芦別市の3市において、耕作面積約1万戸、総農家数約1000戸で水稲を基幹に小麦、大麦、なたね、そば、大豆などの畑作物、トマト、アス

バラガス、菜の花、メロン、かぼちゃ、馬鈴しょ、花きなどの収益性作物を組み合わせた農業を営んでいる。

小麦の収量低下を機に12年から本格作付け

もち性二条裸麦（通称・もち麦）「キラリモチ」に取組むきっかけは、病気の拡大などによる小麦の収量低下だった。JAたきかわの畑作地帯では秋まき小麦や春まき小麦、なたね、大豆を基幹作物に輪作。アワ、ヒエ、はと麦の栽培も行っていたJAたきかわ雑穀生産組合「エゴマの会」は現状の輪作体系に新たな作物導入を検討していたところ、雑穀の取引先から大

麦を紹介された。

空知農業改良普及センター・中空知支所の協力で、2011年に二条大麦と六条大麦10品種を春まきで試験栽培し、その中で1番収量が多かった農研機構近畿中国四国農業研究センターが開発のキラリモチで栽培を行うことになった。12年、農研機構から種子を購入し本格的な作付けに着手。生産者1人、作付面積35町でスタートした。

4月下旬に播種し7月下旬から収穫

作付けに当たっては、4月下旬に播種を行い、7月下旬から8月上旬の収穫まで春まき小麦の栽培とほぼ同様の管理としている（写真1）。



写真1 栽培圃場の確認



写真2 キラリモチの収穫作業



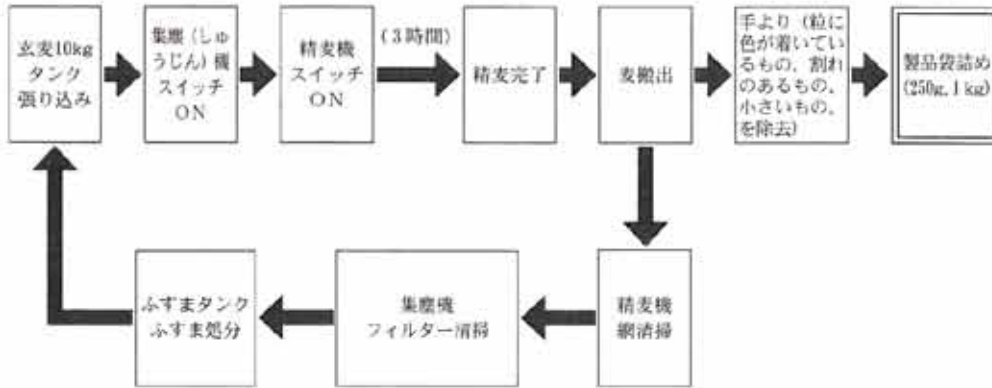
写真3 収穫したキラリモチ

防除については、播種後と5月下旬～6月上旬に除草剤散布し、病害虫に関しては赤かび病防除（開花始めから4、5回散布）と、ムギキ

## 技術特集 | 今注目の高収益作物

図 大麦（もち麦）精麦工程

- ①使用機器：宝田工業(株)3RSB-10 研削式抽精（精麦）機
- ②大麦精麦目安時間：10kg当たり約3時間
- ③精麦歩留まり：60～70%（丸麦）
- ④精麦工程



※精麦速度が低下した場合、ロール、風石清掃

モグリバエ（5月下旬～6月上旬に1回）、アブラムシ類（7月に1、2回）の防除を行っている。

なお、キラリモチは穂発芽しやすいため、収穫時の天候に気を付け適期刈り取りを行っている（写真2）。



写真4 「もち麦」として販売。もち麦と一緒に炊くと、もち麦の食感が楽しめる。

3。収穫後は各生産者の施設の乾燥機で乾燥し、2・4の網目で調製後、フレコンで出荷。農産物検査を受け、JA保管倉庫に入庫している。収穫量は、空知農業改良普及センター中空知支所の熱心な指導もあり、初年度が10ヶ当たり300kg、17年には385kgと安定収量が確保できている。しかし18年については、6月から7月上旬にかけての天候不順によって大幅な減収となり、平均収量は228kgとなった。

「食物繊維豊富」と紹介一気に引き合い増える。作付け当初、一部の地域で話題にはなったが、まだまだ認知度が低く14年までは販売先を確保するのが難しい状況だった。しかし、テレビで「食物繊維が豊富で血糖値やコレステロール値を抑える効果がある」と紹介され、健康ブームによる引き合いが強くなり、15年からは販売も順調に行えるようになった。

主な販売先は生活クラブ生協、北海道さんクラブ（札幌）、くるるの杜（北広島）、砂川ハイウェイオアシス館などで、17年産からはふるさと納税の返礼品にもなっている。

6人で約40kg作付け小麦混合防止の手間も現在、エゴマの会では6人の生産者で、38・7kgの作付けを行っている。需要量が供給量を大幅に上回っているため、作付け者を増やし面積を拡大していきたいところだが、食物アレルギーの問題から、小麦の混合防止のためコンバインや運搬車、乾燥・調製施設の清掃に手間がかかるので、作付け者を厳選しなければならず、大幅な面積拡大は難しい状況にある。

とはいえ、輪作体系の中で必要な作物であり、供給量が不足していることから面積拡大を行い、一人でも多くの消費者に安全・安心なキラリモチを食べていただけるよう栽培を行っていききたい。